

---

# 忠犬

煌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忠犬

### 【著者名】

煌

### 【Zコード】

N3218F

### 【あらすじ】

分かる方は分かるかと。（様々な意味で）

(前書き)

一次創作の氣けがあります。お氣けをつけてお読み下さいませ。

俺は、あんたにとつて何なのだろう。

ふと、そんな事を考えてしまった。

『忠犬』

「あら、珍しく遅刻しなかつたのね」

普段鬼みたいて怖い俺の1上司が柔らかく微笑みかけてくれた。  
思わず頬が緩みそうになるのをくわえていた煙草をきつくくわえ直すことで耐える。

俺は自分の定位置に座る。

そして俺の1下の部下がコーヒーを煎ってくれた。  
そしてまたいつもの日常。  
…に、なるハズだった。

「あれ？」

いつも、その場所でぼーっとしているか女性に電話をしているかしている上司がいない。

「あら、 今日から出張だつて言つてなかつたの？ 確か上の命令で…」

「ツ！」

俺は勢い良く立ち上がつた為に倒れた椅子を気にすることなく部屋を出てゆく。

なんとなく、 視線が痛い。

でもそんなこと初めて聞かされたから、 今は止められそうにない。

何であの人はそういう大事なことを言わないのか！  
何でいつも頑固なのか！

同居している部屋のドアを乱暴に開ければ、 かなり驚いた様子でこちらを見る、 双方。

「お、 おはよ！」

「おはようございます」

「いや、 その

「何で言わないんスか」

有無を言わさず、 俺はかなりの至近距離まで近寄る。  
これにはかなり驚いたようで、 切長の目を見開いている。

「あ、 や、 これはだなあ…」

「言い訳ツスか。」

俺が鋭く問い合わせると、 いつもは強気な光を浮かべている瞳が大きく揺れ、 一筋の熱いものが溢れた。

「えつ……？？」

「……す、すまん……」

見ればうつ向いて華奢な肩を震わせていた。

少し赤くなつた頬が可愛らしい。

ちよつと、我慢の限界かもしれないなかつた。

「あの……ちよつときつニシス。マジで……」

「いいぞっ！」の先、3日程会えなくなるんだからな

うわ！その笑顔マジで反則だよ。  
かなり危ない橋を渡るうとしてるんだよな、俺。  
押し倒しても、黙つて帰つても、

もつ実際考えるのも煩わしい。

「いきますよ？」

甘い睦み合いで確かめあつ互いの心。

だが俺の心に浮かんだ疑問が胸に刺さつたままだ。  
意を決して、聞いてみた。

「おれつて、貴方によつて、どんな存在なんですか？」

「ん？……お手」

え  
つ

「俺つて……やつぱ犬すか」

「うむ。忠犬とでもいつておこひつ」

「え  
」

「だつて、何があつても必ず待つていてくれるだらう?」

どくん

かなり心臓が高なつた。

見透かされた心。

全く、この人には敵わない

「……待つてます」

「うん」

「待つてますから」

「うん。お土産何がいい

「え……」

俺はそこまで言つて、耳元に口を寄せる。

すると、顔を真っ赤にしてこちらを見つめてくる。

「おまつ…………／＼よくもそんな恥ずかしこじが言ふ…………／＼

「あなただけですつて／＼」

俺がそんな事を言えるのは、

あなただけですよ、my master……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3218f/>

---

忠犬

2011年2月3日17時05分発行